ふくいミュージアム

1982．1．1
No．1
（創　刊　号）

福井県立博物館建設準備室

～博物館の計画とあらまし～

全　　景

本県文化の中核施設に

福井県知事
中川　平太夫

県民の皆さん、明けましておめでとうございます。

県ではいま、「県民の創造でひらく文化のふるさとづくり」を県政のテーマに、わがふるさとを高い誇りと喜びを抱く理想郷に築き上げるための諸施策を推進しています。

これまで、美術館・図書館・朝倉氏遺跡資料館などの文化施設を整備してきましたが、更に本県文化の中核的な施設として、県立博物館を建設すべく基本構想をまとめ、昭和59年の開館をめざして建設準備を進めています。

幸いなことに、豊かな自然に恵まれ、長い歴史と伝統を持つわが福井県には、自然・人文両分野にわたる貴重な資料が数多く残されています。県立博物館は、これらの資料を収集保管し、調査研究した資料を展示して県民の方々に地域社会の過去と現在を理解していただき、未来への思索を深める「場」を提供しようとするものです。

こうした博物館の諸活動を通して、郷土に対する愛着や関心を更に促すことができれば、博物館は魅力ある地域社会建設への創造力の原点として大きな役割を果たすものと期待しております。

本年は、福井県にとりまして、次の百年に向っての新しい一歩を踏み出すスタートの年であります。この時にあたり、長期的な視野にたって博物館の建設に着手することは誠に意義深いものがあると思います。

現在、博物館建設準備室では、博物館資料の収集を鋭意進めておりますが、多くの県民の皆さまから情報の提供や資料の寄贈・寄託等多大の御協力を得ることができれば、県民参加の博物館となり内容の充実したより良い施設になると考えております。今後とも、県民各位のなお一層の御理解と御協力を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

県立博物館の基本構想

文化の継承と発展のために

私たちの福井県は、日本海沿岸のほぼ中央に位置し、独自の歴史・風土を形づくってきました。そこで培われてきた無数の歴史・民俗・自然等の資料の大部分は、語るべき多くの言葉を持ちながらも、語る場を与えられずに眠ったままでいます。

博物館では様々な活動を通して、彼らに生命を与え、言葉を引き出し、関連する他のあらゆる情報とともに県民の皆さんに提供することによって、福井という郷土に対する知識と理解を深めていただき、文化を継承し発展させることを目的としています。

人文系と自然系の総合博物館に

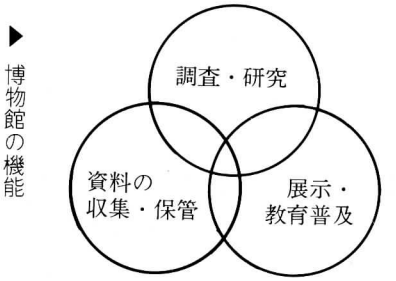
博物館は歴史・考古・民俗・芸術・産業といった人文系を主に、これらを生み育ててきた背景である自然系を加味した「総合博物館」として、資料館・美術館等の県内他施設と調整をはかりながら、相互に協力して事業を行っていきます。

多彩な博物館の事業活動

資料の収集　文化財などをはじめとする実物または現象（例えば民俗芸能）に関する資料及び図書・文献調査資料その他を収集します。盗難、売買などで県外へ流失するおそれのある重要な文化財、資料などについてはこれをくい止め、既に流失している資料は県内に戻す努力をはらわねばなりません。

資料の保管　その性質に応じて、それぞれに適当な保存条件の収蔵庫を設け、修理・復元・防虫・殺菌などの処理もあわせて行い、貴重な資料の散逸、老朽化を防ぎ後世に伝えていきます。

展示　常設展示と特別展示があります。まず「常設展示」では、子供から大人までが楽しみながら学習できるようにし、展示技術にも創意工夫をこらします。空間を効果的に利用し、可能なものについては、「手でふれる」、「動かす」方式も採り入れます。また模型やレプリカ、ビデオ等も自然・歴史・民俗を知るうえで、実物資料と対等な役割りを果します。



「ふくいの自然」「ふくいの歴史」「ふくいのくらし」「ふくいの織物と伝統工芸」の4部門で構成します。

「特別展示」では、博物館のスタッフが調査研究した特定のテーマについての成果を中心として適時開催します。いずれの展示も建物、環境とマッチした「美しさ」を感じさせるざん新なものになります。

調査研究　資料の収集とともに博物館活動の基礎となるもので、地域研究の拠点としての立場から、資料の基礎調査研究、展示技術の研究、発掘調査等を含む各分野の学術調査研究などを推進していきます。その成果は、展示はもちろんのこと、目録・年報・紀要等で発表し、情報サービスとして県内各施設や県民の皆さんに提供します。

教育普及　親しまれ魅力ある博物館を目ざして、講演会・研究会・見学会などを開催し、また、郷土の伝統技術などを体験できる学習室を設けます。更に、入館者と学芸員が気軽にふれ合えるようつとめ、情報の公開を積極的に行います。

地域社会の中にあって、地域住民の方々に、社会教育機関として楽しく、夢のある生涯教育の場を提供するものです。

――以上のような構想のもとに準備は着々と進みつつあります。しかし、福井県立博物館は、これまでに既存の施設や資料を持たず、文字どおりゼロからの出発です。無から有を生むということは、資料の収集はもとより、県民ひとりひとりの参加と協力がぜひとも必要です。福井の文化の顔にふさわしい博物館を、みんなで創っていきたいものです。

県立博物館の位置と建物

博物館は、福井市街の北部の中心地(大宮２丁目)に位置し、交通の便の良いところです。また、隣接して緑に囲まれた幾久運動公園（約32,000㎡）、近くには県立美術館・市立図書館・福井大学等の文教施設が集中し、たいへん環境の良いところです。

博物館の敷地は、約15,000㎡。幾久運動公園との境には人工の滝や小川が計画されており、同公園は博物館を大きく引き立ててくれます。

博物館は、鉄筋コンクリート造りで、地下一階、地上二階。建築面積は、約4,300㎡、建築延面積は約9,000㎡の広さで、規模は県内はもとより北陸でも有数のものです。

建物は、緑の濠に囲まれ、地下が収蔵部門、地上一階が研究部門、管理部門、教育普及部門、特別展示部門、地上二階が常設展示部門になっています。これは、開かれた博物館を目標として、外部利用と日常活動とに対応する機能を地上の二層に有機的にまとめ、収蔵部門を地下に配置して開かれた博物館を支えることにしたからです。

収蔵部門は、一般収蔵庫と特別収蔵庫とに分けられます。

一般収蔵庫は、三室あり、①各種未整理資料の一時保管、②民俗・産業資料の保管、③自然・考古資料の保管となっています。

特別収蔵庫も三室あり、①液浸しておくことの必要な資料の保管、②美術工芸品・絵画等の保管、③古文書の保管となっています。

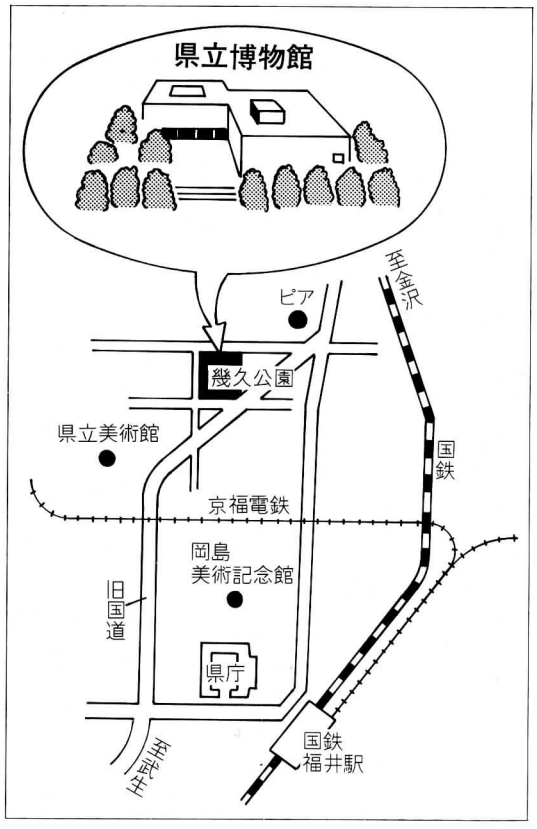
特に、特別収蔵庫はいずれもそれぞれの資料の保存に最も適した温湿度で常時収蔵され、資料の保管には万全を期しています。すべての収蔵庫には、定期的に実施されるくん蒸消毒に備えて簡単な設備があります。また、専用の殺菌殺虫室もあり、資料の保全に万全を期しています。

研究部門には、学芸課室、分野別研究作業室、資料カード室、図書室、資料評価室、工作室、スタジオ・暗室などがあります。研究作業室は、自然・考古・歴史・民俗の各分野ごとに一室あります。なお、資料評価室は、和室と洋室とからなり、中には一時保管の金庫も備えてあり、ユニークなものです。

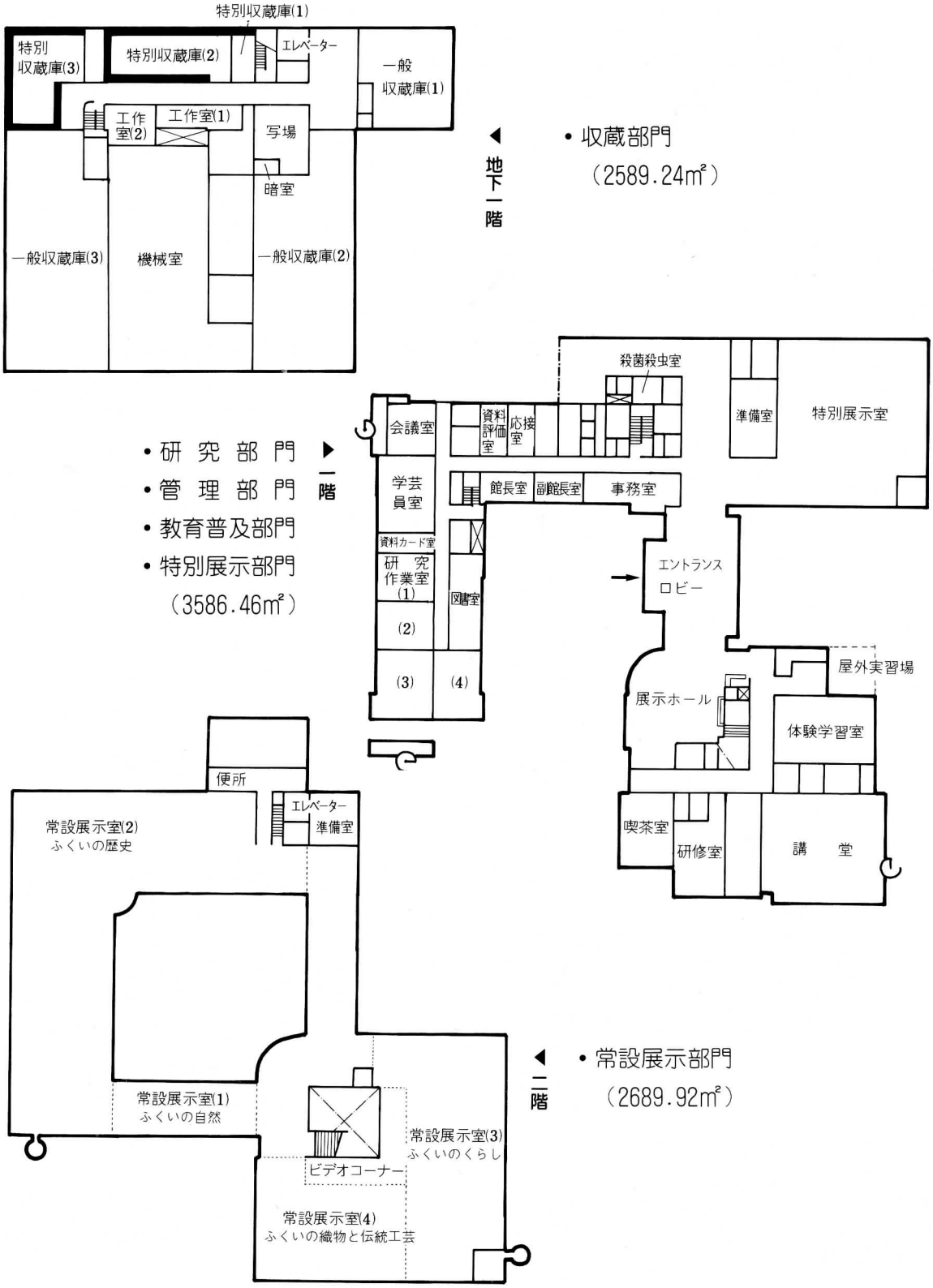
教育普及部門には、講堂・研修室・体験学習室、屋外実習場があります。講堂は、講演会・映画会などに利用します。スロープ式となっており、約180名収容できます。研修室は、各種の研修会に、体験学習室は機(ばた)実習や土器づくり、民俗資料の製作など入館者の体験実習に利用し、いずれも40人程度収容できます。

展示部門には、企画展示を行う特別展示室が一室と、常設して展示を行う分野別常設展示室が四室あり、その他映像資料を見るビデオコーナーも設けてあります。

このような様々な機能をもつ建物を最大限に活用して、皆さんの期待に応えたいと思っています。



▲ 県立博物館の位置


特別収蔵庫(1)
特別収蔵庫(3)
特別収蔵庫(2)
エレベーター
一般収蔵庫(1)
工作室(2)
工作室(1)
写場
暗室
一般収蔵庫(3)
機械室
一般収蔵庫(2)
地下一階
• 収蔵部門
(2589.24㎡)
殺菌殺虫室
準備室
特別展示室
会議室
資料評価室
応接室
学芸員室
館長室
副館長室
事務室
資料カード室
研究作業室(1)
(2)
(3)
(4)
図書室
エントランスロビー
屋外実習場
展示ホール
体験学習室
喫茶室
研修室
講堂
• 研究部門
• 管理部門
• 教育普及部門
• 特別展示部門
(3586.46㎡)
一階
便所
エレベーター
準備室
常設展示室(2)
ふくいの歴史
常設展示室(1)
ふくいの自然
ビデオコーナー
常設展示室(3)
ふくいのくらし
常設展示室(4)
ふくいの織物と伝統工芸
二階
• 常設展示部門
(2689.92㎡)

常設展示について　～ガイドウォールやビデオコーナーも～

博物館の常設展示は、その性格に沿って

1．ふくいの自然

2．ふくいの歴史

3．ふくいのくらし

4．ふくいの織物と伝統工芸

の四つの部門から構成されています。これらは、またいくつかの「主題」からなり、主題はまたいくつかの「項目」からなっています。主題を図示すると次のようになります。

▼　部門別常設展示の内容

分野	主　　題	分野	主　　題
自然	• ふるさとの大地 • 大地のおいたち	歴史	• 近世の越前・若狭 • 近代の福井 • ふるさとの今
歴史	(時の流れ) • 越前・若狭のあけぼの • 古代の越前・若狭 • 仏教のくに • 中世の越前・若狭	民俗	• くらしと生業 • 信仰と祭
		繊維産業	• ふるさとの織物
		伝統工芸	• 技を伝える

各主題ごとの展示は、それぞれの中心的な内容を持った展示物（大型の環境復元模型や実物）を選定し、これを核とした有機的な配列で、ダイナミックなストーリーを組み立てており、子供から大人までが、楽しみながら学習できるよう工夫しています。

その他、大きな特徴は、次のようなものです。

(1) ガイドウォール(時の流れ)

いつの時代でも、福井県内の出来事を、日本の歴史の流れの中で、絶えず比較し、位置づけることができるようになっています。わかり易くするためグラフィック表現(写真、イラストなど)が主体となっていますが、映像や実物も組み込まれています。簡単にいえば、大年表のようなものです。主動線（来館者の主として動く通路）の右側の壁面にあります。

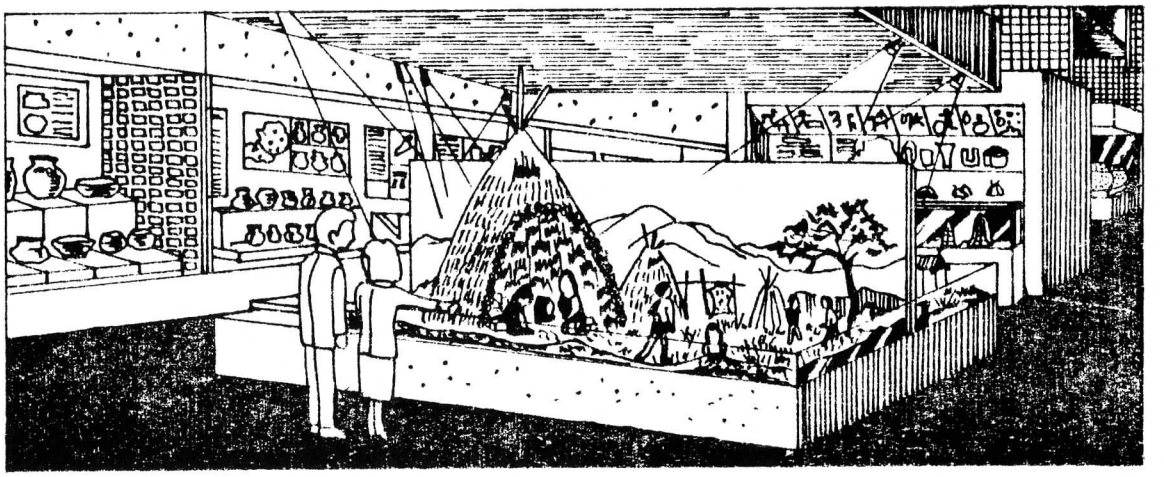
(2) タイムスケール

歴史の流れの中で、展示されている情報内容がいつの時代の情報であるのかを来館者にわかっていただくためのもので、項目解説パネルなどにグラフィック表現で表記してあります。

(3) ビデオコーナー

三つのビデオルームがあり、来館者が自由に、各分野の映像資料を選択できるようになっています。

このような常設展示を通して、ふくいの大地のおいたちやふくいの先人達のあゆみなどを理解していただき、彼らの努力に感謝するとともに、自分達もまた精一杯頑張って、ふるさとふくいをより良く築いていこうとする意欲を持っていただければと思います。

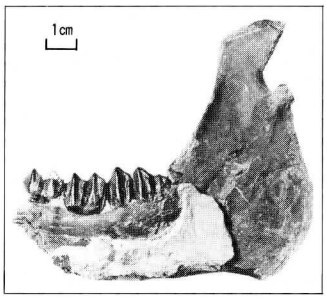


▲「ふくいの歴史」の展示室内完成予想

収蔵資料の一部から

鹿類下顎骨化石〈受贈資料〉

福井市大丹生町産出
新生代中新世(国見累層)
竹山憲市氏(明倫中教諭)採集



本標本の下顎体には大臼歯(M_1〜M_3)が残っており、下顎枝には筋突起と関節突起がみられる(写真)。下顎体の切歯・小臼歯は、発見当時すでに海食によって欠損していた。大臼歯の咬合面は摩耗が進んでなく、歯体の発達も悪いことから未成長の個体のものと思われる。産地からは下顎の他に、距骨・脛骨・橈骨など6点が産出している。この標本は、現在竹山氏によって研究が進められているが現在までに偶蹄目(*Artidactyla*)鹿類であることは明らかになっているが、種の決定にはさらに検討を要するということである。

本標本の採集地付近からは、カキ貝やビカリヤ・アナダラなどの内湾生の化石やスッポンの化石が産出している。鹿の化石は、近くの陸域に生息していたものが死後海域に運ばれ堆積したものと思われる。

この化石の発見によって、約1,500万年前の福井の詳しい古環境が明らかになり、また日本と大陸との連接の関係なども明らかになってくるであろうし、鹿の進化の系譜をたどる上でも貴重な資料となることであろう。　(東)

新溜古墳の石棺〈受贈資料〉

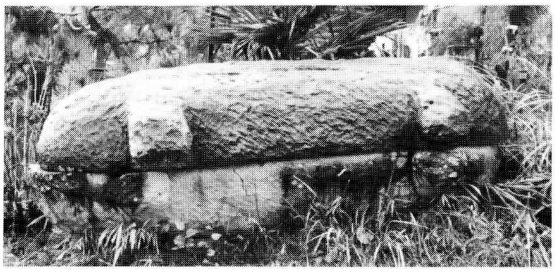
古墳時代
福井市篠尾町　内田己之治氏寄贈

新溜古墳の石棺は、内田氏宅背後の古墳（円墳）を崩して採土中、偶然発見されたものである。

石棺は、笏谷石（凝灰岩）製で、身・蓋ともにほとんど完形に近い。棺の身・蓋の両長側面にはそれぞれ2個の縄掛け突起が付いている。身の大きさは、長さ約270cm、幅約110cm、高さ約50cm、厚さ約15cmあり、蓋もほぼ同じ大きさである。

棺内からは、副葬品として鏡・勾玉・ガラス小玉・鹿角装大刀などが発見され古墳の築造時期は、5世紀末〜6世紀初葉に比定されている。なお六体の人骨も発見され、追葬されたことが分かる。

この石棺は、堂々としたもので、王者の棺と呼ぶにふさわしく、福井市の指定文化財となっている。(青木)

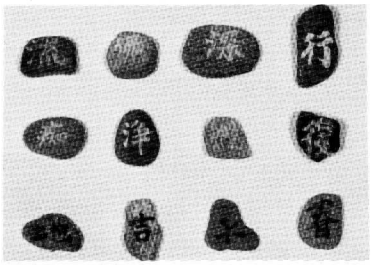


横市経塚経石〈受贈資料〉

明治時代
武生市横市町　小柳久市氏寄贈

いわゆる経塚のうち一字一石経塚は、経典を礫石に一字ずつ書写して埋納するもので、近世以降爆発的に流行した。

横市経塚は、明治20年代に池田町寺谷西光寺住職徳井堯譲の建立になる極めて新しい時期のもので、凝灰岩製の巨大な三重石塔の内部に直径2cm前後の膨大な数の経石が納められている。朱書（写真上・中段）と墨書（下段）で写された経典は、法華経、仁王般若経、金光明最勝王経で、銘文だけで61名312,200字の納経が確認される。銘の通りとすれば、本経塚は県下で最多数の経石を持つことになる。今回寄贈を受けた約300個の経石もそのごく一部であるが、一字一石経塚の末期の形態として貴重な資料といえよう。



(久保)

台ランプ〈購入資料〉

高さ：52.3cm

本資料は、真鍮製の燃口を除き、台・油壺・火屋（ほや）・笠はいずれもガラス製で、丸笠には薄い赤色模様が入っている。芯は巻芯で卓上用として使用されたものと思われる。

近代、わが国にもたらされてきた外来文化の中で、ランプはその明るさをもって、容易に人々の暮らしの中に溶け込んだ。明治末期を全盛としながら、すでに併用されつつあった電燈の一般的な普及の時期まで、ランプは日常の照明器具の中心であり、当時の生活文化の象徴であるともいえる。

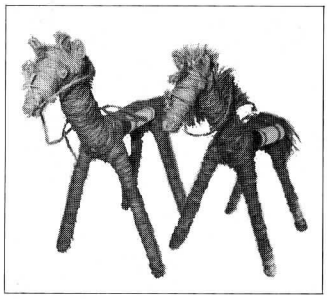
（村野）

田の神の馬〈受贈資料〉

武生市高木町　荻原嘉右衛門氏寄贈

武生、鯖江近辺の村々では、12月5日に「田の神」又は「アイノコト」と呼ばれる行事が行われてきた。一年間稲作を見守ってきた田の神にそなえものをし、豊作を感謝するというもの。田の神の祠をもつ村もある。

荻原家ではこの日、二つの藁馬を蔵の中に安置し、これにぼたもち、そのほかのそなえものをする。田の神は男女の二神で、この日、出雲へ行かれるのだという。藁馬は田の神の依代（よりしろ）ということになる。荻原家の行事は高木町でも特異なものであるが、近くの村でも田の神にミニチュアの馬草鞋をそなえていたから、同様の去来伝承があったものだろう。越前の田の神がまだ十分には解明されていない中で興味深い資料である。（坂本）



資料の収集に御協力を！

資料の収集活動は博物館の生命です。県民ひとりひとりがつくる博物館を目指して、準備室では次のような資料を皆さんから求めています。

- 自然……動植物や化石、岩石、鉱物などの標本。
- 考古……石器、土器、青銅器、鉄器、埴輪、古瓦、古鏡、経筒など。
- 歴史……古文書、古絵図、古地図、古写真、絵画、甲冑、刀剣、仏像、仏画、仏具、古い生活用具など。
- 民俗……仕事着、ハレ着、飲食用具、田畑の用具、漁撈用具、年中行事の飾り、芸能の楽器。その他、繊維産業、伝統工芸に関するもの。

収集は、所有者や地元の意向を尊重しながら、寄贈・寄託及び購入等の方法で進めていきます。

これらの資料の提供、あるいは所在などの情報を大小にかかわらずお寄せください。お待ちしています！

建物と展示の構想も固まり、福井の文化の中核として最先端をいく新しい博物館（Museum）でありたいと願って、本誌のタイトルを「ふくいミュージアム」としました。

胎動は次第に高まり、うぶ声をあげるのも目前です。県民の皆さん、ご期待ください！

ふくいミュージアム　No.1　1982.1.1
編集　福井県立博物館建設準備室
発行　福井市大手3丁目17－1（〒910）
福井県教育庁文化課内
TEL　0776－21－1111 ㊥ 4223
印刷　河和田屋印刷株式会社